地域資源を育てる

5 「三国湊」という名にこだわって

西澤 弘之
NISHIZAWA Hiroyuki
NPO法人三国湊魅力づくりPJ
理事長

北前船寄港地の繁栄を伝え、旧森田銀行本店の保存運動を原点とする三国湊の魅力づくりに向けた活動は、県の助成事業を経てNPO法人へと発展した。今でも絶やさず三国湊の魅力を創造、発信し続ける活動は、多くの地域資源と人々の熱意によって育まれている。

残された旧森田銀行本店

日本海へと注ぐ九頭竜川河口沿いに細長く横たわる三国町は、古くは『続日本紀』に三国湊として登場し、室町時代には「三津七湊（さんしんしちそう）」の一つとして数えられ、江戸時代末期から明治時代にかけては北前船の寄港地として繁栄を極めた。

そんな往時の繁栄を今に伝える歴史建造物「旧森田銀行本店」が、所有者の手により解体の危機にあったのが今から15年前、当時の三国町長の大英断でこの建物を買い取り、その後相当額を投じて大修復工事がなされた。平成11年7月の事で、改めてその偉容を仰ぎ、つくづく残されて良かったと心から思ったものである。

私たちの活動の原点は、この建物が保存されたことと市民グループが声をあげ取り組んだ保存活動にあったといっても過言ではない。

三国湊魅力づくりプロジェクト実行委員会

平成16年初夏、福井県より地域ブランド創造活動推進事業の助成に対する公募が発表された。それは「各地域が持っている地域資源を活用して新しい地域のブランドを創ってください。そして最終的には起業にまで繋げてください」との主旨のもので、「3年間に亘り年間1,000万円を限度に、主にソフト事業を対象に助成しましょう」と言う画期的なものであった。それまで単発的に地域の活性化イベントを実施していたものの、資金的事情などもあって打ち上げ花火的なものに終始していた。地域的な盛り上がりに欠けた閉塞感の中で「これは自分たちの為にある助成制度だ！」と内心思ったものである。

丁度各地で地域の活性化が一層叫ばれていた時で、県内各地から相当数のプロジェクトがエントリーしてくる事が予想され、そんな中から採択されるにはどうしたら良いかをメンバーで話し合った。有難い事に、私たちの三国は何と地域資源に恵まれている事か。東尋坊を核とした海岸線の自然景観、街中の歴史資源、文化芸術、伝統芸能、それに海産物を中心とした食、丘陵地での果実や有機栽培による農産物などなど枚挙にいとまがない。これらの地域資源を組み合わせて付加価値を高め、他の地域との差別化を図ろうとした。

そこで街中のメンバーだけではなく、観光協会の若手経営者や、丘陵地で有機農業と取り組むメンバーたちとの連繋、融合を試みた。そこで結成されたのが「三国湊魅力づくりプロジェクト実行委員会」。つまり三国湊の魅力を包括的に地域ブランド化しようと言うものであった。

写真1　旧森田銀行本店

写真2　笏谷石を用いた謂れ書き

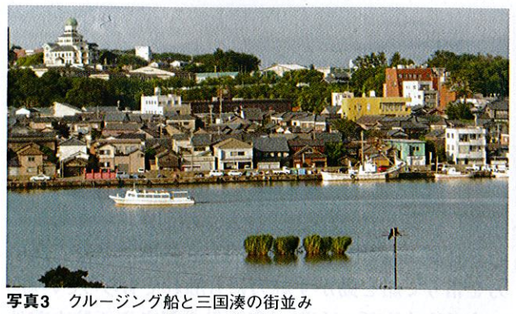
写真3　クルージング船と三国湊の街並み

実行委員会3年間の主な活動

初年度の平成16年は、実質活動半年間で街中散策と海洋クルージングを組み合わせたエコツアー事業、丘陵地ではグリーンツーリズム事業に着手した。三国湊の歴史文化を知るポイント約20箇所に、福井産の笏谷石（しゃくだにいし）を活用した謂れ書きを設置し、来街者への利便は勿論、地域住民の意識の高揚を図るとともに、ホームページを立上げて三国湊の魅力の発信を開始した。一方では新商品の開発に向けて試行錯誤を繰り返していた。

2年目の平成17年には、ジェラートの店カルナを開店（運営は有限会社三国湊物語）。本場イタリアに視察して開発した本格派で、地元のミルクや農産物を中心に全国から厳選された素材を用いるなど徹底的に拘った一品。店内の内装も若者が中心に皆でつくった。今では休日ともなると、経常的に行列の出来る人気スポットになっている。一方エコツアーもバリエーションを広げ、日本の夕日百選を眺めに行くサンセットクルージングや夜の街中散策、ライトアップされた街中古刹でのライブコンサートも毎回好評を得た。

3年目の平成18年、街中回遊の観光拠点となる三國湊座（運営は有限会社三國湊座）をオープン。街中にあった錆びたシャッターの降りた材木倉庫が変身した。街中散策ツアーやレンタサイクルの受付、食事や喫茶、地元名産品の販売は勿論、週末にはお芝居やコンサート、名画鑑賞会などなど、若者が集う機能も発揮してきている。ここで開発された三國バーガーは、県内産の牛肉や名産花ラッキョウをピクルス代わりに、そしてコシヒカリの米パンとこれまた拘りの一品で、某有名全国誌にかなり初期に紹介された事もあって、人気商品となっている。ファストフードの代名詞ハンバーガーが、三国では食の安全に配慮したスローフードとなった。

実行委員会からNPO法人へ

一方、県の助成が無くなる4年目以降の活動に備え、平成18年2月に実行委員会の主力メンバーを中心に「NPO法人三国湊魅力づくりPJ」を設立した。助成終了後も継続的或いは発展的に活動し、折角築き上げてきた気運を絶やさないようにとしたもので、「三国地区の魅力の発信」「各種の文化イベント実施」「自然環境の保全と啓蒙」を3つの柱に、三国地区の活性化に関する事業の実施を活動の目的としている。

結果的に、3年間で3つの法人の立上げと、新しい地域ブランド商品「カルナのジェラート」「三國バーガー」の開発に成功した事になる。

我々の活動と平行して、三国町（現在は坂井市）が進めていた街並環境整備事業では、平成16年春に江戸末期の三国独自の町家建築様式をそのまま復元した「旧岸名家」のオープン以降、道路のカラー舗装や歩道の石畳化、周辺店舗や民家のファサード部分の美装化も順次進行していた。平成18年春には「旧梅谷家」を改修し、来街者や地域住民の利便を図る施設「三国湊町家館」もオープンした。こうして点と点が繋がって線になった。

閑散としていた通りは、若者やファミリーがジェラートやバーガー片手に散策を楽しむ通りへとなっていった。名付けて「三國湊きたまえ通り」。平成18

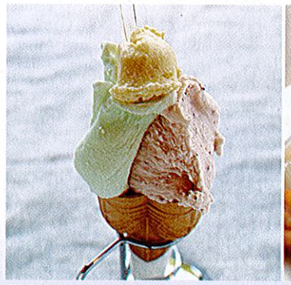
写真4　カルナジェラート

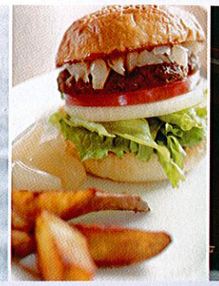
写真5　三國バーガー

写真6　三国湊きたまえ通り

写真7　掛け花入れ

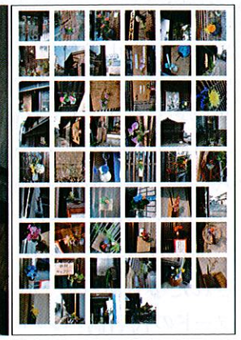

写真8　工夫を凝らし活用されている数々の掛け花入れ

年秋の事である。

次に、NPO設立以降実施してきた幾つかの事業について述べる。

三国湊のまち・海・緑・そしてひとを結ぶみち

平成19年、日本風景街道近畿地区13ルートの一つとして三国湊のみちが登録された。地元住民・市民団体・行政が一体となり、道を演出し美しい風景をつくっていこうというものである。旧市街地・三国港突堤（国重文）東尋坊・雄島・丘陵地を結ぶ道を活かして地元の活性化に繋げる事が目的である。まずは旧市街地の路を三国湊らしさで演出していこうと、地元陶芸作家による掛け花入れを制作（平成20年に100個、平成21年に90個）し、希望する各家に配布、軒先や玄関などに飾ってもらう試みを行っている。来街者のみならず地元住民からもまちを散策するのが楽しくなったとの嬉しい声を聞いている。併せて旧市街地の街中散策マップも制作した。

三国湊こどもエコスクール

自然や三国湊の魅力、九頭竜川との繋がりを楽しみながら体験学習していく場をつくろうと、平成17年より小学生を対象に「三国湊こどもエコスクール」を開催している。当初は2泊3日でスタートさせたが、平成19年からは、夏に1週間という長期滞在型のプログラムに変更し現在に至っている。

主な流れとしては、三国湊に集合後、えちぜん鉄道で九頭竜川沿いを上り、勝山市の山あいの集落に出かける。そこで、川・水・生きもの、自然について学び、川魚や郷土料理を食べて小原集落の古民家で一泊する。次の日は、勝山の街中や平泉寺を散策し、三国湊との繋がりを探してみる。再び三国湊まで戻った後は、そのまま水上バスに乗り、九頭竜川河口から日本海へ出て、これから活動する街並みや自然景観を海から眺める。3日目からは、海の魅力を様々な角度から知ってもらおうと、雄島の散策、ビーチコミング、ボディボード、ライフセービング体験、磯遊び、磯釣り、タコ罠しかけ、地引き網、漁船での釣り体験を、そして昔の帆掛け船を復活させ、風の力を借りて船を動かす魅力にも触れてもらっている。

自分たちで採った海の恵みは、刺身や干物など地元の漁師達と一緒に調理して食べる。お米・野菜・調味料などもなるべく地元のものを使い、収穫体験も行う。三国湊の街中散策では、くねくねまがった小径を歩いてもらいながら、駄菓子屋にも寄り、最後はお寺で昔のこども遊びをする。もう一つ、かつてお茶屋さんだった建物がそのまま残っている小料理屋さんで、ちょっと背伸びしてお座敷体験もしてもらう。

このようにエコスクールは、多くの地元の方々や三国を愛する若者に、講師として、また裏方で協力して頂いている。最終日には、1週間の思い出を詰めこんだアートボックスを制作・展示し、お世話になった方々を招いて、こども達が主催の感謝パーティーを開いている。

三国湊緑のリレープロジェクト

「三国湊緑のリレープロジェクト」は海岸線沿いの枯れ松、丘陵地の荒れた里山を手入れしていこうと平成19年に発足した。平成9年に起きたナホトカ号重油流出事故から10年を経て、当時のボランティア活動「バケツリレー」「三国方式（ボランティアを受け入れる体制づくり）」をもう一度振り返り、重油事故から里山問題へ発展させ、バケツリレーから「緑のリレー」へ、三国方式から住民・ボランティア・行政・専門家とのパートナーシップによる「第二の三国方式」へと継承し、今後のまちづくりへ発展させようという試みである。

写真9　エコスクールでの磯釣り

写真10　エコスクールでのライフセービング体験

写真11　緑のリレープロジェクト

写真12　演劇『寿歌』

写真13　「三国湊の路」作品

市有地や私有地を借り、人の賑わい・他の生きものの賑わい・地域社会の賑わいによって「賑わいの森」をつくろうと「継続できる森づくりのしくみづくり」「専門家・ボランティア共同での実践」「広がり―異業種とのパートナーシップ／九頭竜川流域ネットワーク／中長期滞在ボランティアの受入体制―」に取り組んでいる。

実際の里山手入れは月1回と、2泊3日から1週間のワークキャンプで行っている。ワークキャンプでは、県外にある大学の学生とのタイアップを平成20年から実現。森づくり・森と歴史文化・森と三国湊をテーマに、月1回の勉強会も実施している。

三国湊とアート

三国湊は全国的にも異色だと言われる、文芸に縁のある町でもある。

江戸時代中期の三国の遊女で俳人でもあった哥川（かせん）にはじまり、三好達治、高見順、多田裕計（ゆうけい）、小野忠弘、荒川洋治（ようじ）など、多くの詩人・作家・芸術家が生まれ、或いは住み着いて、数々の名作を生み出した。これらの大切な地域文化資源を土台として、ヨソモノ（外部からの視点）との交流の中で新しい文化を創出し、三国湊から全国へ発信していこうと、「アート×地域づくり」をコンセプトに取り組んでいる。どのプロジェクトもヨソモノには三国湊に滞在してもらい、磁場・風土・人情を浴びながら作品づくりを行ってもらう事を主軸としている。

平成18年には、演劇公演『寿歌（ほぎうた）―タツジとカセン―』を上演した。北村想（そう）の『寿歌』を脚色し、三好達治の詩をちりばめ、核戦争が終わった世界で、たまたま生き残ってしまった3人が故郷三国湊へと帰って行くストーリーとした。芝居小屋は、足場を組んだ仮設のテントをつくり、地元漁船の大漁旗200枚を借りて会場を埋めつくした。

平成19年には、近松門左衛門の歌舞伎作品の中で最高傑作といわれる、三国湊が舞台となった『傾城仏（けいせいほとけ）の原』を現代に蘇らせ、現代劇『けいせい仏の原』として上演した。また同時に、文学の街三国湊をアピールしようと、縁のある文芸人約60名の詩や小説の中から500フレーズを集め、暖簾をつくって各民家の軒先に吊るしてもらい、江戸時代から変わらぬ三国湊の道筋を文学の路として浮かび上がらせる試みを行った。

上記の演劇は2本とも、出演者及びスタッフは地元と東京とで半々、演出家には中島陽典（ようすけ）氏を招聘して作品をつくりあげた。

平成21年には暖簾を発展させ、「三国湊の路―現代アートと文学のアジール―」を開催した。金沢在住の若手現代アート作家2名に、三国湊の文学とコラボレーションする形で新しい作品を制作してもらい、屋外―路―に展示してもらうプロジェクトである。作家土方大氏（ひじかただい）は三好達治とのコラボレーションによる『圓』を、佐合道子（さごうみちこ）氏は哥川とのコラボレーションによる『あなたへ捧ぐ―』を制作発表した。

今後は、この三国湊の路を継続的に行い、国際芸術祭にまで発展させていければと夢を持っている。

多くの方々の協力と共に

活動の一端を紹介させていただいたが、我々メンバーも楽しみながら事業を進める事ができた。曲がりなりにも短期間のうちにここまで辿りつけた要因を挙げるならば、県の担当者が我々の目指したい方向をよく理解して柔軟に対応してくれた事、活動初期の段階から丘陵地等の農業者との連繋が計られた事、事業パートナーとして選んだコンサルタントが街づくりのみならず、環境、芸術、文化面においても非常にスキルが高く、街中に入り込んで我々を覚醒させてくれた事、地元メディアが好意的に毎回記事として取り上げてくれた事などである。そして何よりも数多の地域資源に恵まれた事に改めて感謝したい。

司馬遼太郎『街道をゆく―越前の諸道』の中にこのような件がある。「……『続日本紀』以来、みくにみなとは三国湊と書かれ江戸期もそうであった。……なぜ、町名を決めるときに古来そのように称されつづけた『三国湊』としなかったのかまことに惜しい。」

平成22年3月1日発行[年4回1月・4月・7月・10月発行]

Civil Engineering Digest

2010 April 247

特集

福井

地域資源にみる独創性

社団法人
建設コンサルタンツ協会
Japan Civil Engineering Consultants Association